

平成 30 年度大学院共通科目「国際インターンシップ」 公開報告書

修士課程 人間総合科学研究科 スポーツ国際開発学共同専攻 2 年
嘉正 空知

「ルワンダオリンピック委員会におけるインターンシップと 東京オリンピックに向けた東アフリカ各国の取り組み」

○国・実施期間名： ルワンダ、キガリ、ルワンダオリンピック委員会

○実施期間： 2018/04/03-2018/07/13

○目的

このインターンシップの目的は、主に三つある。①ルワンダと日本の市町村が結ぶ事前合宿の覚書案を調整すること。②オリンピック協会参加の各競技団体の現状を把握し、改善案を提案すること。③IOC オリンピックソリダリティの伝統スポーツの復興プログラムに参加すること。以上の三点がインターンの目的だった。

加えて、自身が有するスポーツ科学に関する知識をルワンダの人々と共有し、スポーツを通じた開発の支援を行った。また、明らかにされていない東アフリカ諸国のスポーツのニーズを把握し、今後の先進国の支援の在り方についても考察した。

○実施内容

①オリンピックの事前トレーニングにおける調整では、内閣府のオリンピック担当及び、岩手県の八幡平市と協力して条件を練り直し、覚書案の修正を行なった。調整に当たっては在ルワンダ日本国大使館及び、JICA ルワンダ事務所の職員の方々に協力していただいた。

②私がインターンをスタートした時期は 2018 年のコモンウェルスゲームが開催されており、ルワンダは結果として一つもメダルを取れずに惨敗した。そこで、各競技団体に何が問題なのかを問う質問紙を配布し、問題点を洗い出した。また、各競技団体が 6 月中に実施した Genocide Memorial Tournament に帯同し、競技が草の根レベルでどの程度発展をしているのかを調査した。

③ルワンダの伝統スポーツを使ったオリンピック教育の実施では、Nyanza にある OlympAfrica の施設を視察し、担当者とヒアリングを重ねて指導案の作成を行なった。学校のテスト期間と重なった為、実際に実行するまでには至らなかったが、今後のオリンピック教育のきっかけとなる提案を行うことができた。

④海外出張では、ウガンダとケニアのオリンピック委員会を訪問し、東京オリンピックに向けた調査を行なった。各国の進行状況をまとめたレポートを東京オリンピック組織委員会に提出した。

○成果

①2018 年 05 月 15 日にルワンダオリンピック委員会・八幡平市間で東京オリンピック代表選手団の事前トレーニングにおける協力関係の合意に基づく覚書の調印が執り行われた。自身も伝統衣装で作ったスーツを着て会議に出席し、調印の見届けを行なった。

②各競技団体を回ってアンケートを集め、多くの関係者から話を聞くことができた。特に多かった意見としては、「お金も大切だが、競技団体をマネジメントする人材がほしい」、「もっと海外のトレーニングやコーチングスキルを学びたい」が見られた。財政的な支援や物的支援をお願いされると思っていたが、人的支援のニーズが高いことがわかった。

③国際オリンピック委員会のオリンピックソリダリティプログラムの一環として作られたOlympAfricaの施設は、小さな図書館があるだけで、オリンピック教育は実施されていなかった。また、オリンピック学会が無い為、オリンピック委員会でもオリンピック教育が何か浸透していないことがわかった。

④ウガンダとケニアのオリンピック委員会では、事前トレーニングの候補地との関係を明らかにし、進捗状況を把握することができた。ウガンダはトレーニング計画がしっかりしており、日本の泉佐野市と協定を結んで順調に計画が進んでいる反面、ケニアは一切日本と連絡が取れていないことがわかった。

〇まとめ

東アフリカの国々とやりとりをする中で、時間を守らない、メールの返信が来ないなどの問題と遭遇した。また、自分のメリットがないと協力をしないとスタンスも見受けられた。しかし、一方で先進国のアイデアを積極的に受け入れようとする姿勢を見せる人々や、スポーツを通して自分の国を豊かにしたいという夢を語ってくれる人々にも出会えた。これは、自分がアフリカに来る前は想像もしていなかった出来事であり、アフリカは遅れているという固定概念が根底から覆された。

日本とは全く違う環境の中で3ヶ月半生活をするのは簡単では無かったが、ルワンダオリンピック委員会の同僚を始めとして、たくさんの人々に支えられながら乗り切ることができた。日本のスポーツを通じた支援は、物的、財政的支援に偏りがちだが、これからは現場のニーズに合わせた人的支援も必要になってくるだろう。JICA等と協力して、スポーツへの支援のあり方を提案していきたい。

